

子供と一緒に暮らし

偶然にも、ここで乾かしていたビニール手袋が、まるでお店の冷蔵カーテンに見えてしまうという「奇跡」に驚きと笑いが止まりませんでした。(筆者)

HPでは写真を一部割愛しています



冷蔵カーテン

ウメの実を運ぶK児

環境こころの教育はなっ

数日前、ウメの木がほとりぽとちまき黄緑色の宝石で埋め尽くされた。この事件にすぐに気が付いた子供たちは、その恵みを両手に抱え、やがて、バケツいっぱいそれを集めると、大きな歓声をあげた。その傍らで担任は、近々子供たちとウメジュース(本物)をつくるためにと、こちらも負けじと瓶をいっぱいにするのだった。今日のK児。ビールケースで雨樋に勾配をつけ「ここで何かを転がしたい」と試行錯誤。もつといものはなにかと、ちようど探していた矢先、あつ。あの日集めた大量のウメのことを思い出した。早速、あのバケツを持ち込むと、ころころ、ころころ、何度もその実を転がしてみては、雨樋の角度を調整し、すっかり夢中のK児。友達が数名加わり「流しウメそうめん」のイメージで遊びが進むと、ウメの実をちゃんと綺麗に洗ってから流したいということと、バケツに水を溜め、その中でよく洗ってから転がすことになった。しばらくすると、バケツの中でウメの汁がじわじわと染み出し、甘酸っぱい香りとともに水が濁り出す。これに興味をもったK児らは「ウメジュースつくり」へと遊びを展開していったのだった。あつという間に二時間が経ち、片付けの時間。K児は、ウメを大切に集め、運び出した。どこに置こうかとききよるきよるしながら、向かった先は、テラスにあるエアコンの室外機(写真)。K児は、ウメをトレイにのせて三往復。保育者と目が合うと「冷蔵庫で冷やしておくの」と、微笑んだ。

保育者のこころがすこし環境への構え

無論、小学校や幼児教育施設には、それぞれの事情があり。本事例の園は、だいが古いつくりというところもあり「なぜここにこれか?」の設備が時折見られます。当時は斬新なものであつても、生活等の変化により、やはり、どんなものでも形骸化していくものであつても、新しいものであつても、固定化され過ぎると多様な子供たちを育むには物足りない環境となる場合もあるでしょう。本園ではこれまでも歴代の保育者がその都度知恵を絞って、絶え間ない工夫を続け、子供中心の生活を実現してきました。一つ一つ、子供の目にどう映り、子供の手にどう届いているのかを、子供たちの実際の姿から見とり、気付き、日常的に空間をデザインしているのです。この室外機は、設置されたその当時から「なぜここに?」の不満の声でいっぱいでした。子供の生活動線の真ん中を陣取る室外機。だからといって保育室へのエアコン設置のためには仕方なく、保育者は知恵を絞って合図です。まずは安全を確保する必要があります。立ち入り自体を禁止する、という案もありましたが、それでは子供の生活が制限されてしまいます。

ましてや、世の中に危険がゼロのものはない、全てを取り除いて生活させることが果たして大切なのかという議論も起こり、目に見えるものは基本的に自由という理念に立ち戻ったのです。そこで、これがどういうものであるか子供と共有していくことを第一としました。よくよく考えてみると、自立した生活を目指す園ではこれは室外機に限った話ではありません。次に、子供が室外機に近づくことを前提に頑丈な網で囲い、ここを定期的な点検箇所に加えました。あれから数年経った今、室外機は子供たちの生活に溶け込みました。K児は、この上に置けば冷房されたお部屋のように冷えるはず!と、冷蔵庫のイメージと重ねたようです。いい隙間を見付けると、室外機からの熱風を浴びながら「冷蔵庫で冷やすんだ」と期待を込めてウメを収納しました。この子には、明日もきっと、素敵な出会いが待っていることはいつた「いいこと」だと思います。「あれ使えるかも!」本園の子供からはこの言葉がよく聞かれています。暮らしをよりよくしようとする態度が、園の教育理念のもとで、日々醸成されているのです。



ココです。

